

二つの復興物語 「気仙沼・石巻」

震災が再発見した人と自然と記憶
古田尚也

UCN日本リテラシー・コーディネーター

5年前、東日本大震災によって発生した津波によって、東北の沿岸地域は各地で大きな被害を受けた。同時に、震災は、それまで日常に覆い隠されてきた、場所ごとの人と自然の関わりの記憶を再発見する契機ともなった。今回は、気仙沼前浜と石巻南浜の二つの地区における、人と自然の関わりの記憶を媒介とした復興の物語を見ていきたい。

撮影・古田尚也 協力・東北学院大学 千葉一

災害に立ち向かう コミュニティの力

宮城県気仙沼市前浜地区は、旧本吉町に属する海沿いの集落である。2011年の東日本大震災では、死者行方不明者8名と40世帯の住宅が被害を受けた。以前は、遠洋漁業の乗組員など漁業者も多かったが、現在では多くの世帯は近隣に勤めを持ちつつ、週末に農業をしている世帯も多い。

前浜地区は、もともとコミュニティ活動が活発な地区として有名であった。特に、年1度開催される地区の総合文化祭「前浜おらほのとっておき」は、最長9日間も開催される一大イベントで、遠方からわざわざ来る参加者もいるほどの人気だ。そのほかにも、「熊野神社祭典奉納演芸会」（ふるさと祭り）、新年会、「大漁唄いこみ」などの民俗芸能の伝統がいまでも色濃く残されている。

こうしたコミュニティ活動の中心となっていたのが、「前浜マリンセンター」という名の地区集会所（コミュニティセンター）であった。マリンセンターは、「おらほのとっておき」の会場として、また「大漁唄いこみ」などの芸能活動、通常の集会和協議の拠点として活用されていた。

「こうした活動を通じて形成された地域の絆や相互的な人間関係が、いざというときに大きな役割を果たします。それは実際に、東日本大震災後の前浜地区の避難所で確認された出来事でした。それまでに培われた人間関係や役割分担が、避難所や震災対策本部の運営にそのまま活かされたのです」

そう語るのは、前浜地区出身で現在東北学院大学で非常勤講師などを務める千葉一さんだ。

前浜地区では、震災後、いち早くこの「前浜マリンセンター」を再建しようという機運が盛り上がった。当初は、集会所より住宅のほうが優先度が高いのでは、という声もあったが、2回にわたる住民に対するアンケートの結果、96%が再建に賛成するという結果が得られたことから、再建事業が開始された。

上/ 照葉樹植樹地に立つ千葉一先生。左/かつて豊かな磯場だった前浜漁港は、昭和50年代にコンクリート化が進んだ。
(写真提供：千葉一)





住民主導の再建事業 ロー(老)テクも大活躍

この「前浜マリセンター」再建事業の特徴は、徹底して住民主体のボトムアップで計画と事業が進められた点にある。2011年10月に、避難所を切り盛りしていた地域の人たちが中心になって

「コミュニティセンター建設委員会」が立ち上げられ、それ以降ほぼ毎週のように会合を開催し、2012年3月には気仙沼市長あてにセンター再建の計画案と要望書を提出した。

こうした地域の取り組みに対して、キリスト教団の1つ、ルーテル教会をはじめとして国内外のさ

さまざまな団体や企業からも援助が寄せられ、これらの援助を元に、高台に土地を確保し、マリセンターの再建が始まった。

新しいマリセンターは、木造平屋建ての自然環境に配慮したものである。その材料となった木材の約90%は、前浜地区の住民が地元の木を伐採し、寄付したものである。

前浜地区と伝統芸能の交流があった山形県最上町黒沢地区から



上/住民が提供した杉材を、住民みずからが焼杉加工し外壁としている。ビスの頭に、目立たないように子どもたちが塗料で黒く塗る仕上げ作業。左下/前浜マリセンターの上棟式でのお祝いの「ぐず餅撒き」。これに使われたモチ米のほとんどは、愛知県豊橋市立大崎小学校の子どもたちが支援してくれたもの。交流は今も続いている。左下/上棟式で餅拾いに興じる子どもたち。住民手作りの丸餅3000個が撒かれた。(写真提供:千葉一)



は、大黒柱が寄贈された。棟持ち柱にも、最上町から贈られた杉の太木が使われている。また、建物を木造としたことで、住民自らがさまざまな形で建設にもかかわることができた。木材の伐採、製材、乾燥、外壁の杉を焼く作業や漆喰塗り、そしてデッキ作りも住民が行った。

「特に、海や畑仕事で培った高齢者のロー(老)テクは大活躍でした。アワビも獲れば、イチゴも作るし、大工仕事もこなす小器用な爺ちゃん達の大活躍には目を見張るものがありました」と千葉さん。

上棟式では、地元の人々が作り、女性が手作業で丸めて作った3000個の餅が撒かれた。上棟式には最上町「黒澤餅つき唄保存会」の方々も駆けつけ、あんこ・クルミ・きな粉・納豆などの餅が振舞われた。

こうして、2013年9月15日に再建された新しい前浜マリセンターは、気仙沼市の中でもっとも早いコミュニティセンターの再建例となった。気仙沼市の財政に頼らず、住民が自前で支援金や材料を調達し、設計や建築工程に参加して実現したという新しい復興のモデルを示すプロジェクトであったといえよう。

取り組みである。

前浜地区では古くから海岸沿いに多くのツバキが植えられており、その実から、「キリン」と呼ばれる木製の圧搾機を使って油を搾り取り、さび止めやクリーム、食用などに用いていた。前浜の人々は、20年ほど前に、この伝統技法を復活させ、毎年恒例行事として継承してきた。



上/植樹のための基盤整備として、竹と杭で法面をテラス化する作業(写真提供:千葉一)左/ツバキの苗を育てるハウスの中で話す、「前浜おらほのとおき」代表の畠山幸治さん。

また、今回の震災による津波では、コンクリートの堤防の多くが決壊し、その背後にあった松の防潮林が根こそぎ流され、背後地の被害を拡大させる要因となったという反省もあった。さらに、震災後気仙沼を襲った大火事が

起きたことで延焼を食い止める防火帯の必要性も痛感された。こうした背景から、ツバキを中心として、もともとの地域に自生していたシロダモ、マサキ、ヒサカキ等の海岸植生を基本とした森を作ろうというアイデアが生まれのたという。このアイデアを実現するために

「実は、このプロセス自体が復興であり、コミュニティの再建であり、同時に地域の防災・減災と災害対応能力の向上につながるのです」と千葉さんは指摘する。

「ツバキは植えっぺー」 前浜「樺の森」プロジェクト

震災後の前浜でもうひとつ進行しているのが「樺の森」プロジェクトである。これは、津波で被災した場所に「ツバキは植えっぺー」という震災後の避難所での住民の発言がきっかけとなって始まった



上/上棟式の日駆けつけた最上町の方々。左下/最上町から寄贈された大黒柱。左下/最上町黒澤神社の境内に植樹する前浜住民。(写真提供:千葉一)



「前浜おらほのとおき」では、賛同する企業から助成金を得てツバキの苗を育てるハウスを建設した。

また、早稲田大学のボランティアセンター(WAVOC)もこのアイデアに賛同して、苗作りや植樹のための基盤整備のために学生や教職員をボランティアとして派遣することを決定する。現在、WAVOCでは、地元の人々と一緒にツバキをはじめとした照葉樹の種子や幼樹を採取し、キャンパスで大学生や高校生が育苗を行い、採取から2〜3年後に前浜に再び植樹するという活動を進めている。「昭和津波をきっかけに、前浜地区では浜の前の道路がすでにかさ上げされています。今回の震災後行政から高さ9・8mの防潮堤建設計画が提示されたのですが、それは必要ないと思っています」と「前浜おらほのとおき」代表を務める畠山幸治さんは言う。

このように、気仙沼市前浜地区では、震災をきっかけに、災害対応能力としてのコミュニティや他地域との結びつきの大切さ、そしてツバキを媒介とした人と自然の関わりや歴史が再発見され、住民主体の復興活動に活かされようとしている。



上/震災後、豊富な伏流水や地下水によって南浜地区の元の湿地環境が自然に再生された下/湿地環境が再生されると同時に、そこに生息するさまざまな生き物も戻ってきた(写真提供:阿部聡史)



津波が明らかにした地域の風土
宮城県石巻市の南浜地区も、気仙沼前浜地区と同様に、震災がきっかけとなり、それまで日常に覆い隠されていた地域の自然や歴史、文化を再発見し、それらを活かした復興の道を模索している地域のひとつだ。

津波跡地に残された祈念場。これらはすべて過去の水害の教訓を伝え、また、海上安全の祈願を行う場であった。上/善海田稲荷神社。右下/北向き地藏。左下/瀧仏堂。



石巻市は、今回の震災によって大きな被害を受けた地域のひとつである。特に、北上川の河口に位置し、太平洋に面した南浜地区には約7mの津波が襲い、壊滅的な状態となった。南浜地区は旧石巻市内の中で、死者行方不明者が400人以上と最も被害が大きく、建物等はほぼなくなり、更地状態となっている土地がほとんどとなっている。現在、国と宮城県、石巻市はこの南浜地区において、「石巻市南浜地区復興祈念公園(仮称)」の計画作りを進めている。昨年5月にはその基本計画が公表されている。

石巻出身の環境デザイナーの阿部聡史さんは、震災後、こうした南浜地区を見つめ続け、その土地の成り立ちを読み解きつつ、住民と一緒に風土や歴史に基づいた公園計画を提案してきた。「まず、南浜地区の土地利用の変遷を、古地図や航空写真によって解析しました。すると、この場所が縄文時代には海、その後の変遷で湿地帯だったことがわかってきました。その後、低い土地は水田として、高い土地は住宅として使われるようになり、戦後高度成長期の時代になって全面的に住宅地化しました」と阿部さん。今回の津波によって南浜地区の住宅はほとんど流されてしまったが、残された文化・歴史遺産は皮肉にもすべて過去の水害の教訓や海上安全の祈願のために作られたものであった。この南浜地区は、古来より水害が多く、そのために亡くなられた方々への「祈り」の民俗知が育まれた場所でもあったのだ。「地区を南北に走る聖人堀と呼ばれる水路やその脇に立つ北向き地藏などの歴史遺産が、この地区の人間界と聖界を分ける境界として認識されていた」と阿部さんは指摘する。震災後の南浜に通い続けた阿部



環境デザイナーの阿部聡史さん。南浜地区の風土に基づいた復興計画を提案する。復興祈念公園における空間デザイン検討委員会委員を務める。

さんはまた、南浜地区でかつての自然環境が再生していくプロセスにも遭遇することになる。南浜地区は、すぐ北側に位置する標高約56mの日和山からの養分を含んだ豊富な伏流水と地下水、降雨、潮の干満などによって、湿地帯がかつて水田だった場所を中心に自然に再生されていた。「こうして再生された湿地やため池には、ミナミメダカ、スジエビ、タナゴなどの水生生物やトンボ類などのたくさんの生き物が戻ってきたのです。また、かつて雲雀野海岸と呼ばれた名前のとおり、ヒバリなど野鳥もたくさん戻ってきました」と阿部さん。さらに、これら南浜地区の湿地の塩分濃度を継続的にモニタリングすることによって、日和山から供給される淡水と海からの海水が混じり、常に変化し続ける汽水域としての環境特性も明らかにしてきた。

また、2014年10月14日に石

巻に近接した台風19号による豪雨は、こうして出現した南浜地区の湿地帯が自然の遊水地としての防災機能を発揮することも明らかにした。

さらに、阿部さんは、こうして読み解いた南浜の風土の情報を市民に周知したうえで、その意見を復興祈念公園の計画づくりに反映させるため、「石巻市南浜地区の未来を考える会」を結成し、2014年10月〜2015年3月まで、合計4回の市民ワークショップを開催する。

4回にわたるワークショップで市民から出された855もの意見を分析した結果、南浜地区における「追悼記念」の定義がいくつか浮かび上がってきた。

こうして阿部さんが地道に積み上げて作り上げた計画案は、これまでに行方不明によって組織された委員会などにも提案され、一部の考え方は基本計画案にも反映されている。今後は、新たに設置された市民協議会を通じて、市民と行政の新しい関係をさらに一歩進めていくことが課題だという。

復興をめぐる重層する時間と記憶

5年前、東日本大震災によって発生した津波によって、東北の沿岸地域は各地で大きな被害を受けた。同時に、震災という非日常は、それまで日常に覆い隠されてきた、それぞれの場所の人と自然の関わりや記憶を再発見する契機にもなった。



上/日高山から見た南浜地区下/[石巻南浜地区の未来を考える会]を結成し、計4回の市民ワークショップを開催(写真提供:阿部聡史)



気仙沼前浜地区と石巻南浜地区の例で見たように、こうした手ごかりをもとにして、それぞれの土地の風土や歴史・文化を活かしながら、住民が主体となって地に足をつけた着実な復興を模索する地域もある。一方で、決められた期限や行政の手続きの中で進められきた復興事業では、多くの課題も明らかになってきた。現在、東北各地で問題となっている巨大防潮堤の問題はそのひとつの象徴ともいえるだろう。

Naoya Furuta

大正大学地域構想研究所教授。東京大学大学院農学生命科学研究科博士課程単位取得退学。三菱総合研究所を経て、2009年よりIUCN(国際自然保護連合)の日本オフィスにおいて生物多様性に関する国内外の政策展開に従事する。

再発見された人と自然のかかわりの記憶を、私たちは今後どのように活かしていくことができるのか。気仙沼前浜地区と石巻南浜地区で続く二つの復興の物語は、私たちにその課題と希望を教えてくれているようだ。